

ライフサポートねりま

症例概要 50代 男性

利用期間：202X年4月～202X年11月

既往歴：右被殻出血・高血圧症・脂質異常症・静脈血栓症・症候性てんかん

入所の経緯

入所前年の10月に発症。開頭血腫除去術施行し11月には他院回復期に入院したが、注意・記憶障害などの高次脳機能障害残存、階段昇降にも介助が必要な状態で、独居での4階へのご自宅退院は困難と判断され当施設へリハビリ目的で入所された

内 容

左片麻痺・感覚障害重度であり全般的に介助が必要で、入所時には表情が乏しく、車いす操作は注意障害の影響で壁への衝突を認めた。また、短下肢装具装着が不十分な状態で車いすのフットレストを踏みながら立ち上がるなど、転倒のリスクが高く離床時にも常時見守りが必要な状態だった。また病識の低下があり自宅に帰ればなんとかかなると退所後のイメージがわからない状態であった。

そのため入所時の多職種カンファレンスにより課題を明確にし、共有を行った。ご本人は言語理解が乏しいために、多職種と話をする機会を多く持ち信頼関係を深めるだけでなく、一つ一つの課題について体験してもらい理解し、納得するまで繰り返し介入した。具体的には、入所時に紙面課題を毎回提供していたが、1時間以上同じ所を見ているだけで、ヒントや誘導をしないと回答が出来なかった。また起立の自主トレを指導したが、職員と一緒にあればと実施できる状況で、リハビリ以外は食堂の椅子で携帯電話の情報を眺めているだけで、一日を過ごしている状態だった。

入所時より希望のあった自費リハビリを入所後1ヶ月で開始し、歩行訓練を強化した。リハビリ時間の拡大に伴い活動量も増え、自宅退院に必要である4階までの階段昇降も行い、棟内を杖使用で歩行自立を目指した。また、徐々にご本人の意欲向上を認め、病前からの趣味である競馬の話をするようになり、屋外歩行での競馬新聞の購入を週2回取り入れた。

その事をきっかけに、職員やご利用者との会話が増え、余暇時間の充実ができ、劇的に表情が変わった。また、夜間多尿による排泄課題に対しては、看護師やケアが時間誘導やパットの変更等の工夫を行い、なんとか失禁なく過ごす事ができるようになった。職員全体が懸命に取り組み、ADLが向上した。

そしてフロアでは、雑誌等を読むだけでなく書き込みをされるなど、集中力が上がった。また他のご利

用者に対しても気配りを行ったり、常に笑顔が見られるようになった。自宅退院に向けてご本人・ご家族の同席のもと家屋評価も行い、ご本人の自宅退院のイメージがより高まった。

退所時には、屋外歩行1km獲得し、階段昇降は手すり使用で自立し公共交通機関の利用も可能となった。また当初から自宅退所に向けて、ご本人、ご家族、在宅ケアマネ、訪問リハスタッフ、当院の多職種で念入りな打ち合わせを行い、当施設のチームから在宅チームへの引継ぎや課題の共有を行うことで自宅環境が整い、ご本人にもわかるパンフレットを作成し退所指導を行った。その結果、ご自宅4階は手すり設置が困難なため、1階の店舗スペースを居宅に変更し退所となった。